

# きらら新聞 28



「書を読み、自然に親しみ、勤労にいそむ」

2006年  
6月30日

発行 キララ新聞社  
発行責任者 秋山 眞兄  
山梨県北州市白州町横手 2259  
白州郷牧場内  
TEL:0551-35-0131・4520  
FAX:0551-35-0132

私とキララと白州と 中里 悠子

おお、その出会いは小学校の五年生の夏でした。  
「ここは一体なんなのか。皆、何が楽しくて集まるのか？」と、一週間。帰りたい帰りたいと思いつつ便秘になる毎晩泣くは、それはそれは迷惑な子供でした。

言うまでもなく、その後キララとは疎遠（妹は毎年楽しく行っていたのに）。しかし、これは迷惑第一弾。序章に過ぎなかったのです。

高校に入り迷惑第二弾。高校一年目のG.W. 運命の電話でG.W.の学校へ行くことになりました。そして今度は「白州にいたい。いるしかない。」とキララの学校が過ぎてても居座り続けました。

なにがあったかはいつか話すと、わがまま娘は白州へのめり込み、居候生活開始。「本当に」迷惑をかける女、再登場です。その後どうなったかという話はいつかのいつか話すと、白州の人々や自然のおかげでどうにか人の道に足を入れてもらい、今は東京で学生生活を送り休日たまに微力ながら手伝いに牧場へお邪魔している感じです。

今はしてもらってばかりいる私ですが、支えてくれている白州で出会った人のように、誰かの力になれるよう東京でも白州でもモット学んでいこうと思います。目指せ！「本当」は力になる女。

## 本を読んでみよう！

「おおきな木」  
シェル・  
シルヴァスタイン  
(篠崎書林)

本ではなく絵本の紹介です。  
大きなリンゴの木が、一人の少年が年老いるまでの間ずっと愛を捧げ（与え）続けるお話。

少年はリンゴの木で遊び、リンゴを売り、リンゴの枝で家を作り、大きな幹で船を作り旅に出る。

最後に年老いた少年が、小さな切りカブになってしまった大きな木の元へ戻ってくる・・・

読み終わると、少々痛々しくも感じるが、読み終えた時に何とも言い難い「深さ」に驚かされ、と同時に心がジーンと暖まるのです。

あとがきにもありましたが、「愛を与えること」とは人間の能力の最高の表現であるという思想の元、人は「与える」ことにより生の喜びすべてを経験するという。この本にはひとつの物語として大きくその意味が形成され、凝縮されているが、日々日常の中でもその意味の大切さは感じる事ができる。

与えられ、与え、愛の循環模様とも言うべきか、私にとっては絵本ではあるが（絵本だからこそか？）とても大事な1冊です。是非、親も子も共に一緒に読んで欲しいです。 秋山澄兄

ここから戦争が始まった！

四月、桜もまだ咲かない頃、新谷君がコロコロ・コロコロ播種機を押し歩き、五月の始めにはほうれん草・小松菜・春菊・ラディッシュの畑が何枚も緑の海になりました。

それから約一ヶ月、7人の横手のおばさんたちの葉物との格闘が続きました。朝、8時から夕方6時までひたすら葉野菜の中に混ざる雑草や双葉を取り除き、秤に乗せ、袋詰めです。

昨年秋設置したパック機に、オバサンたちは追いまくられつつ、追い抜きつつ・・・。「あのほうれん草、どうするダー！？」という声をもとめせず、各地の皆さんへ届けられました。



野菜パック機とおばさんたち



## 編集後記

「葉物戦争」（と農場のスタッフは言った）が続き、この28号も予定を遅らせてお届けすることになりました。大変辛いことに、この遅れは、白州・横手に在住の井上さんと出会わせてくれました。この号は井上さんのレイアウトで完成に漕ぎ着けました。前号27号から、キララのホームページに掲載されています。これも井上さんのお陰です。

夏の学校の準備が始まっています。献立委員会が充足したり、野外生活のためのインフラ整備が始まったり、韓国からは10人の子供達の参加が決まりました。

中々肌寒さの抜けない今年の白州の初夏ですが、夏野菜の苗も少しづつ成長し知も夏の様相となってきました。

次号は7月末、夏の学校直前に白州の様子などお知らせする予定です。 キララ本部 見田由布子

## 「品性」に付いて思う

数 学者・藤原正彦の「品格」シリーズ著書がベストセラーになっている。生徒に「人間は「品性」が大切だ」と30年にわたって叫んできた私にとっては、「お株が奪われた！」という気がしないでもない。だが、藤原は「品格」、私は「品性」と微妙に違う。教育の根幹の一つは「品性の涵養」と私は考えているが、「品格の涵養」というのはどこかなじまない。第一、キララに「品格」とか「品格の涵養」は相応しくない。そんなことは「糞食らえ」（この「品格」のなさ！）と、頭から大方は思っているに違いない。

辞書によれば「品格」は「品位、気品」で、「品性」は「ひとがら、人格、人品」ということらしい。そうすると「品格＝気品」と「品性＝ひとがら（人格）」に置き換えれば、品格と品性の相違は明確になる。「気品ある婦人」という表現が小説に良く出てくるが、それはその婦人の「ひとがら」を保障しているわけではない。「気品」などなくても「ひとがら」が最高な人はあまたいる。「ひとがら」がどうしようもないならば、気品があっても「勝手にしやがれ」である。やはり重要なのは「品格」ではなく「品性」なのだ。

ついででだが、英語では「品格＝style(スタイル)」、「品性＝character(キャラクター)」となるらしく、さらに異なっている。もっとも、どちらも日本語にある感性や含意が欠落している。「人格＝personality」ならば、かなり近いかもしれないが、「人格」は明治時代の井上哲次郎によるラテン語「ペルソナ」の訳語として

の新造語だから当たり前かもしれない。ともあれ、品格・品性の中心が英語には薄いのではないか。そうであれば、米国の品格・品性なき行動・言動は「仕方がない」「起こりえて当然」のことなのかもしれない。困ったものである。米国はキリスト教国であるはずだが、その教祖イエス・キリストには「品格」はなかったと思う。飢餓がしばしば起きた貧しい地方の半農半職人（大工）の家に生まれた私生児のイエスにとって、「気品」は無縁であろう。しかし「品性」は彼にとって重大事であった。彼の敵はまさに「品性なき品格」であった。

言葉は面白い。フィリピン語には「丁寧に」「きちんと」にあたる単語がないという。確かに多くのフィリピン人にとって「丁寧に」「きちんと」は似つかわしくない。でも「ホスピタリティ」に満ちているといわれる。日本語では「もてなす」にあたるのだろう。しかし、「ホスピス」などとカタカナ語で通用させているのは、「もてなす」とは完全には一致しない証左だろう。

「春の学校報告」にも記したが、品性なき為政者が、「品性＝人格の涵養」を中心に据えた現「教育基本法」を改正しようとしている。もっとも藤原正彦は、品性どころか品格もないと言っているのだろう。また、現在の日本社会には「品性の涵養」を生み出す素地が失われてしまったといわざるを得ないだろう。

だからといって諦めることはしまい。少なくとも白州などの雄大で奥深い自然と向き合うことは「品性の涵養」に不可欠だ。

秋山 眞兄

## ブルム農学校からミンチョル先生が来ました。

韓国のソウルからまっすぐ南に下ったところにホンソンという町があり、ここに私達が10年を越える交流をしている「ブルム農学校」があります。

この10年、相互に訪問し合い交流を重ねてきました。

ブルム農学校は45年の歴史を持つ民間の私学校で、公立高校に対して、対案(もうひとつの)学校です。韓国には様々なこのような学校があります。

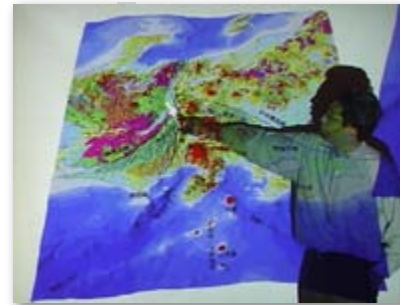
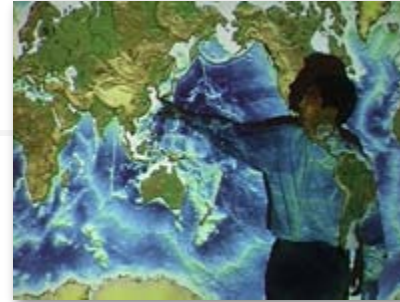
ブルム農学校は高等部で、一学年25人、計70人～80人の生徒がいます。先生・学校職員をいれて100人の小さな学校です。

3年前に、高卒の子や大人が農学と哲学を学べる「専攻部」をつくりました。

白州でもキララだけでなく、「農学校」の設立を目指しており、図書館の完成を記念して今回は白州で講演して頂きました。

ミンチョル先生からは「いろいろな悩まないで早く農学校宣言を！」という激励を貰いました。

関心のある方は、今度ブルムに行きましょう。



白州の子供たちの季節の学校は奥地さんの講座を彼が大学院生の時から持っていました。

「宇宙・「岩石」・「水」・「星座」がそのゼミの入り口でした。名水・尾白川の花崗岩の水と子供達が自宅から持ち寄った水を比較したり、石と水の話の聞いたり、ハケ岳や瑞垣山へ行ったり、南アルプスへ入ったりして、四季折々に「自然学を学ぶ」ことを実に辛抱強く奥地さんにやってもらいました。

今年の冬の学校から視聴覚教室で「奥地・自然学講座」が始まりました。森の中のサイエンス講座です。

白州の学校はややもすると小学生中心のプログラムが多くなりがちでしたが、中学生・高校生のプログラムの充実、子供から大人までの学校へと発展してゆく試みです。

この冬は、第一回「日本列島の成り立ち」というテーマの講義でした。

## 今回は、甲斐駒ヶ岳を始めとする白州の代表的な花崗岩の山の誕生の話となりました。

以下、私の理解です。

白州は北米プレート、ユーラシアプレート、太平洋プレート、フィリピンプレートのせめぎ合う一出会いの場所です。

玄武岩のプレートが沈み込みマグマとなり、水と反応して花崗岩を造る一水が石を造る(のだそうです！)

白州に見られるのは、マグマが花崗岩となって、プレートの隙間にゆっくりと浮かび上がってきたもの。玄武岩は宇宙の星々にあるが、花崗岩は地球にのみ見られる岩石で、軽いので沈み込めない。花崗岩は故郷(プレート・玄武岩)にはもう帰れない。面白いですね。そしてこの花崗岩こそが、バクテリアと水と反応して、生き物が使える水に変える力を最も持つとのこと、白州は素晴らしい地であるとのことでした。他の火山岩も、命が使える水をつくりますが、風化が早いとのこと。まさに白州は千年の「水の都」の地です。

「花崗岩は沈みたくとも沈めない一故郷に還れず、良い水を作る」という奥地さんの話には私は、これは女の生涯の話か？花崗岩は男の石なの？と思ってしまいました。

この講義の翌日、長野県に蛇紋岩の露頭を見に出かけました。

途中、北米プレートとユーラシアプレートのぶつかるフォッサマグナを一望できる所で講義を受け、「あっちはアメリカなのか！」と驚き、フィリピンプレート上にある伊豆半島が列島に突っ込み、南アルプス・中央アルプス・北アルプスの造山(隆起=皺だそうです)が起き、秩父連山も同様と説明を受け、インド大陸の突入のミニ版と知りました。

大きな蛇紋岩の露頭の前で講義を受け、採取しました。

蛇紋岩は白州の BM プラントの飲水改善と生物活性水プラントに組み込まれ、腐植で鉄をキレート化する実験やアミノ酸でマグネシウムをキレート化し、水に取り込む装置を作りました。

とても疲れましたが、充実した二日間でした。

見田由布子



図書館での講演



ミンチョル先生



奥地拓生さん